

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
原田 <sup>たみ こ</sup> 民子	女 性	2 4 歳	豊橋市曙町 (設楽町田口)

## 「大陸の花嫁」

「東三河郷開拓団からの手紙」より

(部分修正)

### ○ 大陸の花嫁として渡満

私は昭和17年、桜の咲く3月末、満州へ開拓民の妻として渡りました。自分で大陸へ行く決心して出かけたものの、汽車の窓から桜を見ながら、ああこの花を私はもう何年、何十年先でなければ見られないだろうなあと思い、汽車の中で泣きながら内地とお別れしました。彼方此方と宿泊しながら7日か8日かけ、やっと満州に着きました。着いた先は山もなければ海もない、真っ平らのかすむような平原、それもどちらを向いてもまん丸く見えるのです。子供のころ地球は丸いと習いましたが、山の中で生まれ育った私にはよく分からなかったのですが、ここへ来てやっと本当だと思いました。朝になるとそのまん丸い東の野原から真っ赤な太陽がむくむく昇り、そして夕方には西の野原へ沈む、その大きく美しいこと、私一人で見るとはもったいない、内地の母や兄にも一度見せてやりたいなどと思い、毎日が本当に幸せでした。

その幸せもたったの4年で、恐ろしいところが変わってしまいました。それは戦争に負けたからです。やっと仲良しになれた満州の人、兄弟のようにお付き合いできるようになった人たちが、昭和20年8月15日を境に、いっぺんに匪賊と変わってしまったのです。鉄砲や槍を光らせ、または長い柄のついた鎌を持って襲ってきて、日本人の持ち物はみんな手当たり次第に持って行き、ちょっとでも逆らえば鉄砲で撃つ、槍で突く、鎌を振り回す。それはそれは言葉ではとても言い表せない怖い目に遭いました。また、代わる代わるやって来て物を取っていくので、持っていく物が何もなくなると、家に火をつけて焼き払ったりされてました。

一番びっくりしたのは、目の前で一緒にいた人が鉄砲で撃ち殺されたり、畑の中で何か所も突き刺されたりで死んでいた人は、本当に惨めでした。私たちも昼間は野原に隠れ、夜になると逃げ回ったりしました。満州では11月を過ぎると、とても寒くて零下30度も40度にもなりました。自分の息で鼻毛もまつ毛もまゆ毛も真っ白くカチカチに凍り、寒いのを通り越して痛くなり、野原にじっと隠れてすくんでいると、疲れと寒さで眠気が来るけど、眠ると凍傷になり手や足の指がくさって落ちてしまう。ひどい人はそのまま死んでしまうので、私は3歳になる長男を連れていたので眠らせないように、また動いたり泣いたりすると匪賊

に見つかり連れて行かれるので自分の体の熱<sup>あたた</sup>で暖めていました。また、なだめながらいなければならぬ切なさ、本当に難儀<sup>なんぎ</sup>しました。外地で戦争に負けたほど惨<sup>みじ</sup>めなことはありません。だんだん日がたつにつれ、匪賊だけではなく、ソ連の兵隊まで日に何回となく来るのです。

品物を取っていただけではなく、女の人をさらって行って乱暴<sup>らんぼう</sup>したりするので、若い女の人<sup>わか</sup>はみんなまゆ毛を落とし、ざんぎり頭<sup>かみ</sup>に髪を切<sup>はい</sup>ってしまいました。顔に消し炭や灰をぬり、男女の見分けのつかぬようにしていました。着る物はもちろん、男のなるべく汚れている服<sup>よご</sup>を着<sup>まわ</sup>て逃げ回りました。お風呂は終戦から内地へ帰るまで1年5ヶ月、ほとんど入<sup>こわ</sup>らなかったです。みんな怖<sup>こわ</sup>さと食べ物がないので疲労<sup>ひろう</sup>が続き、不潔<sup>こわ</sup>なのでシラミがわいてシラミからうつる発疹<sup>はっしん</sup>チフスが流行り始めました。



侵攻するソ連軍戦車部隊 図説満州帝国より

毎日何人も死んでいくのですが、匪賊とソ連兵が四方八方から代わる代わる何回となく襲<sup>とむら</sup>ってくるので、吊<sup>とむら</sup>ってあげることもできません。私の所もおばさんとい<sup>あな</sup>とこが死<sup>ほ</sup>にましたが、穴<sup>う</sup>を掘<sup>う</sup>って埋<sup>う</sup>めてあげるすきもなく、やっとの思いで野原<sup>の</sup>に運<sup>かえ</sup>んで行って置<sup>に</sup>いたただけで逃げ帰<sup>かえ</sup>りました。私たちのいた所はオオカミの多い所<sup>の</sup>で、きっと近くでおばさんを置<sup>に</sup>いて帰<sup>かえ</sup>ったのを見ていて、すぐにかき出して食<sup>く</sup>べてしまったことと思います。今思い出<sup>も</sup>しても、申し訳<sup>わけ</sup>なさ<sup>な</sup>と情<sup>せ</sup>けなさ<sup>すじ</sup>で背筋<sup>せ</sup>がぞ<sup>すじ</sup>として、体<sup>せ</sup>から血<sup>すじ</sup>が引<sup>すじ</sup>いていくのが分<sup>せ</sup>かります。でも、どうしてあげ<sup>せ</sup>ることもでき<sup>すじ</sup>ませんでした。あちらで死<sup>せ</sup>んだ人<sup>すじ</sup>はみんな気<sup>せ</sup>の毒<sup>すじ</sup>でした。満州<sup>わた</sup>に渡<sup>わた</sup>った時<sup>わた</sup>は、こんないい所<sup>わた</sup>で住<sup>わた</sup>めるなんて本<sup>わた</sup>当<sup>わた</sup>に幸<sup>わた</sup>せ者<sup>わた</sup>だ、ここへ来<sup>わた</sup>て良<sup>わた</sup>かったと喜<sup>わた</sup>んでいたのに、戦<sup>わた</sup>争<sup>わた</sup>に負<sup>わた</sup>けたがた<sup>わた</sup>めに、怖<sup>わた</sup>い恐<sup>わた</sup>ろしい所<sup>わた</sup>と変<sup>わた</sup>わってしま<sup>わた</sup>いました。私<sup>わた</sup>たちはいつまで逃<sup>わた</sup>げ回<sup>わた</sup>って生<sup>わた</sup>きていかねばなら<sup>わた</sup>んのかと、内地<sup>こい</sup>が恋<sup>こい</sup>しくてたま<sup>こい</sup>りませんでした。

それでも、おかげさまで昭和20年12月に内地へ帰ることになり、家へ帰<sup>こい</sup>たら主<sup>こい</sup>人も先<sup>こい</sup>に除<sup>こい</sup>隊<sup>こい</sup>していて、今は子<sup>こい</sup>供<sup>こい</sup>4人と孫<sup>こい</sup>8人で幸<sup>こい</sup>せにく<sup>こい</sup>らしています。でも、未<sup>こい</sup>だに満<sup>こい</sup>州<sup>こい</sup>に残<sup>こい</sup>留<sup>こい</sup>し苦<sup>こい</sup>勞<sup>こい</sup>している人<sup>こい</sup>たち<sup>こい</sup>に、私<sup>こい</sup>ばかりが幸<sup>こい</sup>せでいるのが申<sup>こい</sup>し訳<sup>こい</sup>ないとい<sup>こい</sup>つも思<sup>こい</sup>います。

平成2年11月5日

(記録者 露野 里江さん)